

平成29年度研究推進方針（案）

平成29年4月13日

研究推進委員会

1 はじめに

一昨年度から道德教育研究協力校としての道德教育の研究が始まり、今年度で3年目を迎える。

研究を始めるまでの本校の一昨年度の実態としては、「週1回の道德の授業が毎週確保できていない」や、「授業の進め方がわからない」という職員の声が多く、そこからの研究のスタートとなった。

当初のその実態から、道德の授業の仕方を学び、週1回の道德の授業を大切にする中で授業力を上げ、深く考える道德の授業を目指していこうという教職員の共通理解のもと、道德の授業に取り組んできた。また、道德の授業だけでなく、それ以外の教育活動全体を通して、児童を育てていくために、各教科や領域、行事の中で、「伝え合う力を付ける」ということを意識しながら、2年間の活動を行ってきた。

2年間の研究を終え、一定研究の形が整い、どの教職員も道德の授業への抵抗感が減り、それぞれに道德の授業力をつけることができた。また、それぞれの分掌・担当で取組をする中で、児童が落ち着いて学習や生活、行事に取り組むことができるようになり、児童の成長が少しずつ見られるようになってきた。

しかし本校の児童には、依然として課題も多い。

学習の面では、学力が少しずつ上がってきているものの、基礎・基本の定着が弱いこと、思考力や表現力に課題が見られること、そして家庭を含めた学習力が低いことなどがあげられる。生活面でも、規範意識に欠けている面があり、主体性がなく周りに流されやすい児童が多いことが課題である。また、2年間重点的に取り組んできた、話す力や聞く力、コミュニケーション力にも課題が見られる。

また特に昨年度、顕著な課題として挙げられたのが、道德の時間では、よい意見を言ったり、よく考えたりできていても、子どもたちの意識の中でそれが実際の生活につながっていなかったり、実践に積極的に生かすことができていないことである。道德に重点的に取り組んできた中で、本質的な児童の内面の大きな成長と行動の変化につながっているという実感を教師自身が感じられていないことについては、最大の課題である。今年度は、道德の授業については引き続き研究を深めていくとともに、児童の実践面について、どう成長させていくかについて検討し、根気よく全校での取り組みを積み重ねていきたい。

具体的な研究内容については、今年度は昨年度までの研究を基盤に、さらに深く考え、自分の生き方を見つめ直せる授業の在り方の研究に取り組んでいきたい。道德の授業については、2年間積み上げてきた、資料や話し合いを通して、自分の生き方を考え、友だちの考えと比べることによって、自分の生き方を見つめ直せるような授業の在り方を引き続き研究していく。そして、授業で学んだことをその授業の中だけで完結させず、実生活で生かしたり、授業で学んだことと実生活での体験が子どもたちの意識の中でつながるような、本質的な学びをさせることを目指していきたい。実際に子どもたちが成長するのは、道德の時間だけではなく、すべての教育活動の中であるという共通理解のもと、子どもたちの意識の連続化を図るため、様々な授業・場面の中で、計画的・意図的な活動を取り入れ、実際の生活の場で実践していけるように取組を行っていきたい。

研究にあたっては、昨年度から引き続き四天王寺大学教育学部教育学科准教授の杉中康平先生や道德専門研究員の先生を始めとした他校の先生方に校内研修に参加していただき、助言をいただきながら、今年度も研究を進めていく。

最後に、これらの研究を進めていくにあたっては、全教職員が常に同じベクトルで、1年間モチベーションを保ち続けながら、道德教育に取り組んでいくことが重要となってくる。道德の授業だけでなく、日常のあらゆる生活場面において、いかに児童を成長させていくかということについて、常に共通理解をはかりながら、取り組んでいきたい。すべての子を「棚倉小の子」という感覚で、自分のクラスの子と同じ感覚で声をかけ、指導をしていく風土の中で、重点研究を進めていきたい。

2 研究主題

自己を見つめ、よりよく生きようとする児童の育成
～仲間とともに考え、深め合う道徳授業を通して～

3 主題設定の理由

子ども達はこれからの社会変化の中で、主体的に判断し、行動できる力を身に付けていかなければいけない。そのためには、一人一人が自分に自信を持ち、自己の生き方についての考えを深め、自己をしっかりと確立できるようにすることが大切である。

そこで本校では、自らの思いを伝え、仲間と共に考えることにより、自分に自信を持ち、自己をしっかりと確立できるのではないかと考え、本主題を設定した。

道徳の時間においては、資料や話し合いを通して、自分の生き方を考えると共に、自分の考えと友だちの考えを比べることによって、自分の生き方を見つめ直し、新たな考えを生み出せるような授業の在り方を研究していく。そのために魅力ある教材の開発や深く考えさせる発問の方法、話し合いの工夫など、様々な観点から研究を進めていきたい。

また、道徳の時間だけでなく、全ての教科・領域をはじめ全教育活動との関連を大切にし、思いを伝え合う活動を取り入れ、実際の生活の場で実践していこうとする意欲や態度を育てていきたい。

4 道徳教育重点目標

- ・よく考え、自分の力で判断し、主体的によりよい行動ができる子どもを育てる。
(善悪の判断、自律、自由と責任)
- ・相手のことを考え、助け合い励まし合う子どもを育てる。(友情、信頼)
- ・みんなが気持ちよく過ごすために、進んで約束やきまりを守って行動する子どもを育てる。
(規則尊重)

道徳の時間では、上記の3点を重点的に指導していくこと、そして教育活動全体においても、この3点を意識しながら、豊かな体験の場を設定し、指導していく。

5 具体的取組

(1) 道徳の授業を通して

- ・魅力ある教材を提示し、心を揺さぶるような授業を実践する。
- ・自分を深く見つめ、考えさせる発問の方法を研究し、実践する。
- ・道徳の時間において、自分の思いを書いたり、伝えたりする機会を設定する。
- ・実生活でより実践力を高められるような授業の工夫をする。

(2) 教育活動全体を通して

- ・道徳以外の教科においても、多様な学習形態を有効に取り入れ、自分の思いや考えを伝える場面を充実させる。
- ・行事や特別活動など、様々な場面において、思いを伝え合う活動を取り入れる。
- ・道徳の時間で学んだ事などを実践していこうとする意欲や態度を育てられるよう、児童が意欲をもって取り組むことができる様々な活動場面を設定し、教職員の意思統一を図りながら、全校で取り組む。

6 研究内容

(1) 実態把握

(ア) 児童アンケート

道徳および生活に関するアンケートを年度初めと終わりの2度実施し、児童の実態把握に努める。

(イ) 学級のめあて・計画の作成

児童アンケートの結果と本校の重点目標から、各学級のめあてを作り、それを達成するための計画を作成する。

(2) 授業に関する研究（授業研究部）

(ア) 年間指導計画

児童の実態に応じた適切な教材の活用と計画的な指導をしていくため、年間指導計画を作成する。教材は「わたしたちの道徳」と副読本、「京の子ども明日へのとびら」を指導計画の中に位置づけ、年間を通して、計画的に実施できるようにする。また、総合単元的な道徳学習を学期に一度、計画・実施し、他教科・領域やその他の教育活動を効果的にリンクさせ、児童が道徳の時間で学んだ道徳的価値を実践し、さらに道徳性を育む場を設定していく。

たなリンピックや日常の活動とのつながりを大切にし、教育活動全体を通しての道徳教育を行っていきけるようにする。

(イ) 総合単元的道徳学習

学期に1回、総合単元的道徳学習を計画・実施する。育てたい児童の姿を目指して、道徳の授業、教科、そして日常生活での指導を意図的に計画し、意識の連続化を図ることで、より効果的に道徳学習を実施していく。

また、実施後には計画をふり返し、成果と課題を明らかにし、日常生活に生かしていく。

(ウ) 授業づくり

考える道徳・議論する道徳を目指していく。答えが一つでない課題についてみんなで向き合い、語り合い話し合うことによって、人間としての生き方について自覚を深めていけるような道徳の授業形態を考えていく。道徳ノートの活用をはじめ、ペア学習やグループ学習、体験的な学習など多様な指導方法を工夫する。じっくりと考えられるよう、時間も十分確保する。

また授業の始めと終わりで、児童の中に気づきや考えの変化があるような授業展開を大切にする。

①発問（中心発問・補助発問）

資料分析から児童が道徳的な価値に気づき、ねらいに迫るための中心的な発問を考える。その中心発問からの児童の考えを予想し、考えたい「道徳的価値」と一致する発問とする。そこから、その中心発問につながる基本発問のみを吟味して厳選し、中心発問と後段で十分練り合えるような時間を確保する。

また、予想される児童の反応から、価値に向かえるような補助発問・追発問を用意しておく。

②伝え合う力

伝え合う力を育成するため、ペア・グループ・全体等、様々な形態での話し合い活動を取り入れる。その際、自分の考えをまとめるための時間の確保を行い、考えたことをペアやグループで交流させる、そしてそれを全体へと広げていくようにする。少人数での交流により、一人一人が自分の考えを表現し、議論することができる場とする。

また、ペア・グループ学習は、道徳の時間だけでなく、各教科で積極的に取り入れたり、特別活動などの場で思いを表現する場面を設定したりすることで、伝え合う力を付けていくようにする。

③道徳ノート

児童に自分の考えを持たせる、そして自分の考えをもとに話し合うことが、考えを深め合い、道徳的価値やねらいに迫ることにつながる。道徳ノートを使用し、書いてまとめる活動を取り入れることによって、自分の考えを整理し、発言しやすいようにする。また終末で、1時間の道徳の時間を振り返ることで、より深く道徳的価値について自覚することができる考える。

さらにそれを毎時間ファイルに綴ることで、ポートフォリオとし、道徳の時間の評価につなげる一手段とする。この評価は教師のみならず、児童が自らを振り返って、成長を実感し、これからの課題を見つけるという児童自身の評価となるよう、道徳ノートを活用していきたい。

(エ) 評価

児童の成長を見守り、努力を認めたり、励ましたりすることによって、児童が自らの成長を実感し、さらに意欲的に取り組もうとするきっかけとなるような評価を目指すための研究を行う。

- ・道徳の時間における道徳ノートによるポートフォリオ評価
- ・道徳の時間以外の教育活動全体における児童の成長の様子によるパフォーマンス評価
- ・児童分析（抽出した児童）による継続的な評価

(オ) ローテーション授業

1つの道徳の教材を作成し、学年の両クラスで実施する。1つの教材研究に時間をかけることができ、また同じ教材で2回授業ができるので、改善をしながら授業ができ、授業力の向上が期待できる。また、他クラスの状況を把握できることによって、自分のクラスだけでなく、学年の児童としてとらえ、課題を共有することができる。

(ケ) 授業研究

各クラス1回、年間計12回の研究授業（うち小中連携の授業研究3本、中間発表での授業研究3本）を行う。→各クラス2回ずつ（うちブロック研3本はブロック研）

指導案の作成に当たっては、「考えを深め合う授業の工夫」の項目において、考えを深め合う道徳の授業づくりをするうえで、工夫するポイントや授業改善の視点を明確にし、意識するようにする。

研究授業前には、指導案をもとに事前研究会を実施し、授業後には、授業評価シートをもとに、事後研究会を充実させることで、全教職員が課題を共有し、日常の指導へとつなげていけるようにする。

また、事後研究会後には、授業研究部を中心として、研究授業から見た課題や方向性についてまとめ、次の研究授業につなげる。

（３）教育活動全体を通して（実践活動部）

（ア）合言葉「日本一輝こうチーム棚倉」

「日本一輝こうチーム棚倉」を全校の合言葉として、それを目指してそれぞれの学級活動や委員会活動に工夫を加え、取り組んでいく。また、全校での統一した取組も行い、全教職員で共通理解を図りながら、重点的に取り組む。

（例）・児童会本部（「花いっぱい学校」、あいさつの取組）

- ・安全委員会（名札点検の取組）
- ・放送委員会（ファインプレーニュース） 等

（イ）たなリンピック

従来より取り組んでいる生徒指導や児童会、研究推進、学力充実の取組を整理し、見直し、児童や教師が意欲をもって取り組める「たなリンピック」に取り組む。いろいろな活躍場面を、たなリンピックという取組の中で評価することにより、学校全体でほめあったり認め合ったりする雰囲気をつくっていききたい。

- ・道徳的視点を持ちながら、計画を立て、基礎的、基本的な学習習慣、生活習慣、規範意識について意欲的に身に付けさせる。
- ・学校全体でほめ合う、認め合う雰囲気づくりをする。
- ・道徳の授業や学習活動ともリンクさせながら、一時的でなく、しばらくの期間の児童の意識の連続化を図るようにする。

（ウ）言語活動

児童が、自分の思いや考えを積極的に話し合ったり、考えを深め合ったりできるように、学習場面や教育活動全般を通じて言語活動や環境を整える。各クラスや各学年の児童の実態によって、言語活動を充実させるための工夫を考え、取り組んでいる。

（例）・「話し方名人」「聞き方名人」

- ・宿題の作文と話し合い活動を組み合わせた取組 等

（エ）全校道徳（ファミリートーク）

全校道徳を実施し、ファミリー班（縦割り班）を活用しながら、全校で一つのテーマについて考え、話し合える場を設ける。テーマについては、児童の身近な問題や話題を設定する。

６年生が中心となって話し合いを進め、各自が自分の思いをグループの中で語り合える機会とする。

（オ）ボランティア活動 TCV（たなくらチャイルドボランティア）

児童からボランティアを募り、校内をよりよくする活動をする。児童の自発的な活動の場を設定することで、仲間と一緒に自分たちの生活を自らよくしていこうとする雰囲気作りをしていく。（花いっぱいの学校づくり、校内美化活動など）

（カ）道徳通信

研究授業後、保護者に向けて、授業の様子や児童の感想等を載せた道徳通信を発行し、保護者にも学校での取組を知ってもらい、連携して道徳に取り組んでいけるようにする。

また、地域や家庭と連携できるよう、学校から発信し、啓発・交流していく。

（キ）道徳コーナー

道徳コーナーを設け、研究授業の授業の流れや児童の考えの流れが分かる掲示を行い、児童が立ち止まって道徳に触れ合える場を作る。授業の内容を掲示することで、児童の意識の連続化、さらに教師自身の意識の連続化を図る。

7 研究推進体制

(1) 研究推進委員会……校長、教頭、教務、研究主任（瀬戸）、
ブロック代表（中村、岩崎、吉川）、授業研究部長（岩崎）、実践活動部長（中村基）

(2) 専門部会

(ア) 授業研究部……◎岩崎、大西、村上、清水、田中、近藤、（瀬戸）、（教務）

(イ) 実践活動部……◎中村基、荒川、高井、田口、桂、中村臨、吉川、市村、（瀬戸）、（教務）

(3) 学年・ブロック部会

(ア) 低学年ブロック……中村基、村上、高井、清水、市村、（校長）

(イ) 中学年ブロック……瀬戸、田口、岩崎、桂、荒川、（教務）

(ウ) 高学年ブロック……田中、中村臨、吉川、近藤、大西、（教頭）

(4) 研究推進体制全体図

